

「星」とランボー

三好美千代

序

「僕の宿となる大熊座」、「小さな木の枝に縁取られた暗い紺色のぼろ切れの空の穴から光をおとす星」、「がたぴしする醜い娘たちの腰に支えられた星」、「面頬を付けた下らぬ星」等、ランボーの初期の詩篇には様々な星が登場している。幾つかは非常に巧みな形容をもって語られ、幾つかは何かを比喻しつつも意味の確定が非常に困難であるように見える。星が登場するには不可思議な場面設定、時間設定と共に、星が忽然と登場する詩もある。『地獄の一季節』あるいは『イリュミナシオン』で姿を見せなくなるような星が、初期の詩篇では、重要なテーマとして、様々な形で、ランボーの詩を彩っている。

初期の詩篇において、ランボーの用いる幾つかの用語の意味領域を確定していくことが、彼の思考を理解する鍵ともなるのであるが、*étoile*, *astre* といったフランス語、あるいは星座名で登場する星もそうした用語の一つであるように考えられる。ポール・デムニーに宛てた「見者の手紙」の中で、ランボーはヴィクトル・ユゴーの《ステラ(星)》について言及している。単なる偶然の選択なのか、星に対する彼のこだわりが、《ステラ》を取り上げさせたのか。星は、多くの詩人にとって、各人にそれぞれの意味領域がある。ユゴーを始めとして、ランボーが意識したと思われるボードレール、ヴェルレーヌといった詩人たちも様々な星を語っており、彼の詩に登場する星は、そうした詩人たちが語る星と無縁ではない。さらに、ランボーの詩において他の詩人の作

品に登場する星を意識したと思われる言い回しも見られる。しかし、彼はデムニー宛の「見者の手紙」に添えられた《僕の小さな恋人たち》で、星に対するそれまでの好意的な態度を一転させ、揶揄している。また、高踏派の詩人テオドル・バンヴィルに宛てた《花について詩人に語られたこと》という八音韻詩に登場する星も手紙以前の星ではない。ランボーの瀆聖的性向は「手紙」以降のランボーの初期詩篇に顕著であるが、星に対するランボーの態度の変化を、「手紙」を分岐点として個々の詩に見ていくことで、彼の初期の詩の性格の一面を浮かび上がらせることが出来るのではないだろうか。

ユゴーの《ステラ》

一八七一年五月十五日、彼が詩人になる決意を述べたポール・デムニー宛の手紙の中で彼はユゴーについて、次のように語っている。

ユゴーはひどい石頭ですが、最近の本ではかなり視野が開けています。『レ・ミゼラブル』は本当の詩です。『懲罰詩集』が手元にあります。《ステラ》がほぼユゴーの見る力のほどを示しています。あまりにもベルモンテ風でラムネ風、エホバの神や記念柱といった古い破綻した大げさな主題が有りすぎです。

ランボーは以上のような評価を下して、ロマン派の大詩人を乗り越えようとする。ユゴーの詩は古い主題に彩られている。『懲罰詩集』が取り上げられる。

さて、『懲罰詩集』は一八七〇年末、帝政から共和政への移行、ユゴーの亡命先からの帰国に伴い禁書処分がとけ発刊され、当時のベストセラーとなったものである。ランボーがタイトルを挙げた《ステラ》は、亡命中に書かれたもので、ジャージー島一八五三年七月とある。ナポレオン三世に対する批判に貫かれたこの詩集は、かつてのランボーであれば、心を捕らえるものであったで

あろう。しかし、手紙の時点で、ランボーはある種の皮肉を込めて《ステラ》を語っている。「我は燃えるポエジー(Poésie ardante)なり」と語る明けの明星を、「燃える茨(buisson ardent)」に形をかりてモーゼの前に現れる神、そして救世主の生誕を告げる星にだぶらせて、自由の訪れの先触れとした《ステラ》をランボーはこの詩集の要約と見る。『懲罰詩集』は《ステラ》に収斂される。ランボーはあくまでも詩の刷新という見地からの評価をくだす。たとえば、民衆の立場に立つロマン派の聖職者詩人ラムネ風のユゴーの詩。《孤児たちのお年玉》で、ランボー自身がユゴーのそうした側面を学び、模倣していた筈である。しかし、手紙以降の詩《教会に集まる貧しい人々》を見れば、そうした心情はランボーにおいて、辛辣な表現を用いた教会批判に転じている。「記念柱」については『贖罪』に出てくるヴァンドーム広場のナポレオン一世の像を頂いた記念柱である。かつてユゴーは『薄命時の歌』の《記念柱によせて》でも同じ記念柱を詩に歌っている。四月十三日にその像はコミューンの人々によって取り外されたばかりであった。⁽¹⁾ ロマン派の英雄としての大ナポレオンは新しい詩の主題ではあり得ない。ランボーにとって、聖書の物語りを頻繁に引き、かつベルモンテの仰々しさを思わせるユゴーの詩はもう過去のものとなっている。ロマン主義から抜け出そうとしないユゴーのポエジー《ステラ》が、未来に向けて人々を導くものたりえるのだろうか。「手紙」以降、ランボーにとって、かつての詩人たちによって語られてきた星《ステラ》は、美や自由を導くものではなくなっている。しかし、その経緯を見ていくために、「手紙」以前に戻らなくてはならない。

《僕の放浪》

北フランス、ベルギーへの家出の後、一八七〇年十月初旬、ランボーはドゥエのイザンヴァールの元に二度目の寄宿をする。その時に清書され、デムニーに託された二十二篇の詩の中に十四行詩《僕の放浪》が含まれている。その年

の五月にバンヴィルに送られた詩《感覚》と非常に似通った状況が描かれているが、この詩で夜の小道を徒歩で行く詩人は、野宿をしながらの遠出をしている。恐らくは、シャルルヴィルからブリュッセルにかけての徒歩旅行を語っているであろう。星が登場する箇所を挙げよう。

— 夢見る親指小僧の僕は、道々脚韻を落としていった。僕の宿は大熊座だった。空にある僕の星たちは、優しい衣擦れの音をさせていた。

— Petit-Poucet rêveur, j'égrenais dans ma course/ Des rimes. Mon auberge était à la Grand-Ourse./ Mes étoiles au ciel avaient un doux frou-frou.

ペローの親指小僧は家に戻れるよう、石やパン屑を道に落としていく。夢想家の詩人が、穀物の種を一つ一つ穂から落としていく(é-grener)ように、数珠をつまぐるように落としていくのは詩の脚韻である。彼は野宿することを示す「美しい星のもと(à la belle étoile)」という慣用句を「大熊座のもと(à la Grand-Ourse)」と言い換える。そうすることで、大熊座の「大きな(Grand)」という形容詞を親指小僧の「小さな(Petit)」という形容詞と対比させ、自然の雄大さを際立たせる。「星(étoile)」は女性名詞である。ここに出てくる星たちは道しるべであると同時に詩人を導くミューズの比喩ともなるか。その星が優しい衣擦れの音をたてている。frou-frou という女性の衣服の衣擦れを表す擬音語が、星の瞬きを表すのに用いられ、少年らしい夢の清潔感を感じさせる。また、単数で使われるこの frou-frou は自然自体を一人の巨大な女神と感じさせもする。《感覚》において自然の中に行くことが「女性といるように幸せ(heureux comme avec une femme)」と短く語られた。ここでは、若い詩人の瑞々しく生き活きとした表現を通して、その感覚がさらに巧みに語られている。

《ロマン》

この詩も《僕の放浪》同様、ドゥエ詩帖の二十二編の詩に含まれたものである。十七才の五感を刺激する様々な事物が登場し、幼い恋愛の物語が語られる。その物語を象徴するかのように、星のある風景の描写が挿入される。その描写は一見、唐突に思えるが、そこに登場する星が、この物語に係わっている。

— 小さな枝に縁取られた、濃紺の、ちっばけなぼろ布が見え、小さく真っ白な、悪戯な星がその穴から光を落とし、そして、やさしく瞬いて消えていく...

— Voilà qu'on aperçoit un tout petit chiffon/ D'azur sombre, encadré d'une petite branche,/ Piqué d'une mauvaise étoile, qui se fond/ Avec de doux frissons, petite et toute blanche...

額に入ったように、小さな枝に縁取られたキャンバス地ならぬぼろ布。虫ならぬ星に食われ穴が開いており、そこから光が漏れる。Piqué は「縫い付けられた」とも読めるが、ここでは「虫に食われた(piqué d'un ver)」の振りとして読んでみたい。この星は宵の明星であろう。宵の明星＝金星は、美と愛の女神「ヴィーナス」の星であるが、その星の支配を受けたものは墮落しやすい性向を持つ。夜が更けて他の星の輝きだすと、金星は遠く消えていく運命にあり、《僕の放浪》に出てくる星のように、ランボーの身近にはいず、遠くから、詩人の行動を支配する。一種の狂言回しのような役割を持ったこの星は、生真面目な少年に悪い影響を与える「不品行な星(une mauvaise étoile)」でもある。ヴィーナスの星の支配のもとで冒険を夢想する少年は、その星の悪戯によって道で見かけた少女に恋をして、次々に詩を書き送り、ついには少女からの手紙を手にする。「十七才ともなれば、生真面目ではいられない」という詩人を支配する星がこの星である。ヴェルレーヌの詩集『土星人の歌』の巻頭詩は、土

星の支配を受けている詩人自身の、理性の働かぬどうにもならぬ性向と不幸が歌われる。ランボーは自分の星をヴィーナスの星とする。夢想家の少年を支配するこの星も「幸運の星＝品行のよい星(*une bonne étoile*)」とは言えないだろう。

さて、「見者の手紙」を送ってほどなくデムニーに宛てた手紙で、ランボーはドゥエ詩帖を焼き捨てるように懇願している。二十二編の詩がランボーにとっては捨て去るべきものになってしまったのである。《僕の放浪》、《ロマン》などに見られる星たちは、「見者の手紙」を書いた時点で、ランボーの愛するものではなくなっている。

《僕の小さな恋人たち》

《僕の小さな恋人たち》はデムニー宛ての「見者の手紙」に添えられた三編の詩のうちの一つである。この詩の中では、四つの色の四人の醜い娘たちが踊っており、詩人により、毒づかれている。一連目にある「おまえたちのゴム(*vos caoutchucs*)」を『花について詩人に語られたこと』におけると同様、流露する韻律の比喩と読めば、この詩の中の醜い娘たちは、過去にランボーが愛読した詩人たちの比喩であるという解釈も可能となる。そして、恋人にも例えられるほど過去に愛した詩人たちへの現在の思いがこの暴力性に繋がるのは納得が行く。さて、この詩において、星は二度にわたって登場し、奇妙な語られ方をしている。まず最初に登場する星は次のように語られる。

さあ、ほら！ 今しばらく、僕のバレリーナでいてくれ！ がたびしする腰に
星を一つ支え、お前たちの軌道を回れ！

Hop donc! Soyez-moi ballerines/ Pour un moment!.../ Une étoile à
vos reins qui boitent,/ Tournez vos tours!

ここでは、娘たちが、導きの星あるいは運命を支配する星の一つずつ持っている。そして、tourには「回転」、「旋回」といった意味の他に「言い回し」、「表現」といった意味もあることから、Tournez vos tours! は「お前たちのターンをしろ!」あるいは「お前たちの軌道をまわれ!」と取れると同時に「お前たちの表現を凝らしてくれ!」という命令とも取れ、醜い娘たちがランボーが読む詩人たちの比喩であると考えてもおかしくない。そして、ここに現れる星は、次の詩節との関連で、曲場団で舞台を回る馬とも重なってくる⁽²⁾。

落伍者の星たちの生気のない山よ、隅を埋めよ! 下劣な仕事を背負って神にすがってくだばってしまえ!

Fade amas d'étoiles ratées,/Comblez les coins!/ — Vous crèverez en Dieu, batées/ D'ignobles soins!

ここにある「背負って(batées)」は、背中にものを乗せる動物に使われる用語である。背中に「(詩人たちを導くという)下劣な仕事を背負って」舞台を回る馬と、軌道を回る星が重なりあうことになる。

さて、この星は一体何であろうか。Fade amas d'étoiles ratéesは音韻としてはFade amas des toiles ratées と聞こえ、これはランボーの言葉遊びだと考えられる。スタインメッツ⁽³⁾はこのtoilesを、それに続くComblez les coins!との関連で「蜘蛛の巣」と解釈している。さて、このétoiles とtoilesは詩の脚韻として有効なものである。ボードレールの『悪の花』の《墓》の中にétoiles とtoilesが韻を踏んだ箇所がある。

無垢な星たちが重くなったその目を閉じる刻限に、蜘蛛はそこに巣を張り、
 虻は子を作るだろう。

A l'heure où les chastes étoiles/ Ferment leurs yeux appesantis,/
 L'araignée y fera ses toiles,/ Et la vipère ses petits;...

ここではtoilesが「蜘蛛の巣」を意味しており、これはスタインメッツの説の補強要素となろう。ランボーの先の詩節は、脳裏にまだ新鮮だったこの押韻が元にあるとも考え得る。イザヤ書に「彼らは毒蛇の卵を孵し、クモの巣を織る。その卵を食うものは死に、つぶせば腹がでる。その織物は服にならず、織ったものでは身を包めない」(59.5)とあり、ボードレールはその箇所を踏まえた上で先の詩節を書いている。役に立たぬもの、頼りにならぬものの象徴としての「クモの巣」はまた、精緻な作業をも意味することにもなり、これをランボーが「詩」の比喩として用いたと考えることは出来る。だが、ボードレールを手掛かりに考えていくと、《妄執》にもtoilesとétoilesの脚韻はある。幸福のコレスポンダンスから苦痛のコレスポンダンスへの転換を印すその詩の中で、星の光は詩人の知っている言葉を語りかけ、静寂を与えてくれない。

ああ、夜よ！ その光がよく知っている言葉を話す星さえなければ、どれほどお前を気に入るだろう。なぜなら、私は空虚、暗黒、そして赤裸を求めているのだから。だが、暗闇すら、私の目から幾千となくほとばしり出る親しい眼差しをした今は居ぬ人々がうごめく画布となる。

Comme tu me plairais, ô nuit! sans ces étoiles/ Dont la lumière parle un langage connu!/ Car je cherche le vide, et le noir, et l'enui// Mais les ténèbres sont elles-mêmes des toiles/ Où vivent, jaillissant de mon oeil par milliers,/ Des êtres disparus aux regards familiers.

目が画家の役割を果たし、読み取った姿を心のキャンバスに描き出すという表現がシェークスピアのソネット集(24)に見られ、この詩節にそうした考え方との類縁関係はあるだろう。ここではtoilesは「キャンバス」を意味する。また、同じくボードレールの《亡霊 1.暗闇》には「私は愚弄する神によって、

哀れ、暗闇の上に描くことを強いられた画家の如くだ。(Je suis comme un peintre qu'un Dieu moqueur/ Condamne à peindre, hélas! sur les ténèbres ...)」とあり、これは、当然、先の詩節との関連で読まれなければならない。そうしたボードレールの詩に対するランボーのアイロニーが「落伍者の星＝失敗したキャンバス画」の言葉遊びだったと結論付けるのは早急だろうか。

さて、デムニーへの手紙の二日前、イザンバールへの手紙に添えられた《処刑にされた心臓》では、「フレスコ画」が今までの詩人たちの書く古い「詩」の比喩として用いられ、否定されている⁽⁴⁾。《僕の小さな恋人たち》でも同じ論理が働いている。「失敗したキャンバス画の精彩のない山(Fade amas des toiles ratées)」はランボーが下らぬと判断した詩を意味する。この詩にも「絵画」の比喩が隠されていたのである。踊る醜い娘たちのそれぞれの色は絵の具となる。星を支え踊る醜い娘たちは本当に詩人たちなのか。星を詩人の比喩と読めないのか。ただ、ランボーの他の詩にそうした用例はない。ともかくすでにランボーは彼女たちが醜いと気がついている。ちなみに、「堆積物」を意味するamasは夜空に雲の如く見える「星団」の意味もあり、「星団」においてはひとつひとつの星が輝く訳ではない。

《花について詩人に語られたこと》

《花について詩人に語られたこと》は「見者の手紙」が書かれた後、高踏派の詩人テオドール・バンヴィルに宛てられた詩である。この詩が書かれる一年前、ランボーは同じバンヴィルに宛て自作の詩を送って、『現代高踏派詩集』に掲載をしてくれるよう懇願している。一年を経てランボーの態度は一転する。当のバンヴィルに挑発的態度を示し、バンヴィル流の八音綴詩の中で、バンヴィルの名前を挙げて揶揄する。

さて、この詩の中で、登場する星は奇妙な相貌を呈している。

グランヴィルが手引き紐に繋ぎ、面頬をつけた下らぬ星たちが色で養った
この泣いている丸々と太った赤ん坊の植物たち!

Ces poupards végétaux en pleurs/ Que Grandville eût mis aux
lisières,/ Et qu'allaitèrent de couleurs/ De méchants astres à
visières!

グランヴィルは挿絵画家で、ランボーはイザンバールに宛てた手紙の中で、『パリの悪魔』にコメントをして、「グランヴィルのデッサンほど下らないものが今まであったかどうか教えてください。」と語っている。グランヴィルに対するランボーの評価はかくの如くである。lisièresが何なのか。いまでは、やや古語となっているが、小さな子供を連れて歩くとき、洋服につないであらぬ方向へ行かぬようにする紐を lisière と言ったようである。赤ん坊の花なのであるから、ここに訳出した「手引き紐に繋いだ」という解釈も成り立ちそうである。このころ書かれた他の詩でこの言葉は用いられていないだろうかと探してみると、『座っている奴ら』の中にその用例が見つかる。

荘厳な眠りが彼らの前庇を下ろすとき、彼らは腕に頭をのせ、夢見るのだ。
懐胎した椅子達を、手引き紐をつけた椅子の本当に愛すべき子供たちが、
御立派な事務机（お偉方）を囲むようになるのを。

Quand l'austère sommeil a baissé leurs visières,/ Ils rêvent sur
leur bras de sièges fécondés,/ De vrais petits amours de chaises
en lisière/ Par lesquelles de fiers bureaux seront bordés;...

懐胎し、子供を生む椅子がここで語られている。そして、ここでは lisière が「手引き紐」の意味で用いられている。ならば、『花について詩人に語られたこと』でも、同様の意味で用いられたと考える方が、「森のはずれ」、「洋

服の端」といった解釈より妥当であらし、近年発刊された全集の注釈の中でフォレストイエがこの解釈を取っている⁽⁵⁾。ランボーがこの詩で揶揄しているのは、おそらく一八四七年に刊行された『花の幻想(Fleurs animées)』⁽⁶⁾の挿絵である。花の妖精たちを主人公にしたこの物語は、花を衣装にした女性たちの変身画で評判を取った。しかし、ランボーにとってグランヴィルのこの試みは、それに先立つ詩節にある「昔のサロンの風変わりな花々」へと花のイメージを固定化し、束縛する事以外のなにものでもなかった。「植物の赤ん坊たちを手引き紐に繋ぐ」とはそうした意味に理解出来る。

さて、「面頬をつけた下らぬ星たち(*de méchants astres à visières*)」は女性である。複数で登場するこの星は、ボードレールが『悪の華』の《生ある松明》の最終行で語る「いかなる太陽もその炎の生気を奪いは出来ぬ星たち! (*Astres dont nul soleil ne peut flétrir la flamme!*)」がその語義を明らかにする。ボードレールにおいて「詩人(私)の魂の目覚めを歌いあげつつ(*en chantant le réveil de mon âme*)」歩く二つの星は詩人の魂を引きつけてやまない女性の眼である。そして、その眼は詩人の歩みを「美の街道(*la route du Beau*)」へと導く。しかし、ランボーにおいてはその星は*visières*をつけた星に変貌し、花を色で肥やし、美とされてきただけの価値のないものに、詩人を導く。「衣装に響き豊かな色をまき散らし、詩人たちの心に花の踊りの印象を投げ与える」「不調和でけばけばしい色を取り混ぜた精神」(ボードレール《陽気にすぎる女へ》)の持ち主がそこにいるのかもしれない。ボードレールの詩の一種のカリカチュアである。

また、*visières*は、今引用した《椅子に座った人々》の中で「荘厳な眠りが彼らの前庇を下ろすとき(*Quand l'austère sommeil a baissé leurs visières*)」と、「まぶた(*paupières*)」に代えて比喩的に使用されており、やはり《花について詩人に語られたこと》でも、同様の意味で使用されることになる。上げ下げの可能な「兜の面頬」がもともとの意味である。ラテン語の「見る(*videre*)」に起源を持つこの単語を敢えて「まぶた」に代えてランボー

が用いていることを考えると、この用語は「見者(voyant)」の考え方と無縁ではないように思われる。ユゴーにおいて、星は、「まぶたよ、開け! 輝け瞳よ! (Paupières, ouvrez-vous! allumez-vous prunelles!)」と詩人に呼びかけたが、ランボーにおいては、星自体がまぶたを持ち、おそらくはそれを閉じている。《ステラ》の傲然と輝く星、ユゴーの語った自由の先ぶれのような星では全くない。何も見ていない星である。ランボーは、詩人たちが語ってきた花々を擲論する。ゆりは詩人の「〈散文〉の聖歌の中で青さめるような嫌悪感を耐え忍び」、誇張された薔薇は「月桂樹の茎の上で数知れぬ大げさな八行詩に赤面している」。そうした花々を色で養って来た星は「見者」の星ではなく、まぶたを持った「下らぬ(意地の悪い)星たち」であった。

結び

『地獄の一季節』の《別れ》の中でランボーは「僕は新しい花々、新しい星たち、新しい肉体、新しい言語を作りだそうとした。(J'ai essayé d'inventer de nouvelles fleurs, de nouveaux astres, de nouvelles chairs, de nouvelles langues.)」と語っている。花々については、《花について詩人に語られたこと》で、詩人たちが語ってきた花々が退けられた。肉体についても《水から立ち現れるヴィーナス》で美の象徴としてのヴィーナスが「古い浴槽」から醜い相貌で立ち現れ、その後、『イリュミナシオン』の中の《美しき存在》で、おそらくはそれに変わる新しい肉体が描き出される。また、言語は、『地獄の一季節』の中の《言葉の錬金術》や「見者の手紙」の中で語られている。星もランボーにとって重要な意味を持っていた。本論では *astre* と *étoile* を同等に扱ったが、*astre* は太陽、月といったものも含む用語であることは付け加えて置きたい。ここでは、取り上げなかったが、《最初の聖体拝受》で少女を見守る星(*étoile*)、《オフェーリア》の身体を浮かべた水に映る星(*étoiles*)、あるいは、神秘的な歌を落とす黄金の星(*astres*)がある。

《酔いどれ舟》でも海に映り海面を乳白色に染める星(astres)が登場する。また、《母音》と同じ紙葉に書かれた四行詩は「星(étoile)」で始まる。

そうした星の中で、ランボーの見者の思想を明確にしていくと思われる二つの星、《僕の小さな恋人たち》、《花について詩人に語られたこと》の不可解な星が一体何を象徴しているかを明確にする試みは、一応の手掛かりを得た。ランボーの星の背後には、過去の詩人たちの語る星が見え隠れ、そして、そこから彼らが用いる詩の用語としての星に対する少年ランボーの異議申し立てが浮かび上がってくる。ユゴー、ボードレール、ヴェルレーヌにおいて、星は彼らを支配するものであった。正しく詩人たちを導いていない星自体に対する異議申し立ては、「見者」を目指す詩人にとって、当然のことであったとも言えるだろう。ヴェルレーヌの『土星人の歌』はともかくとしても、ユゴーが《ステラ》で、あるいはボードレールが《生きた松明》で、星に対する絶対的な盲従を歌い上げることがランボーにとって受け入れられるものではなかったに違いない。ランボーに取っては正しい導きをしない星たちが存在したのである。近代の詩人ボードレールが描く星も、ロマン主義の流れを引き継いでいる。ボードレールを最初の見者としながらもランボーは「とはいっても彼は芸術的すぎる環境で生きたのです。あれほど褒めそやされる彼の形式も貧弱なものです」と語る。ボードレールが引きずっている古さをランボーは二つの詩の中で断罪したようにも思える。

本文注

- (1) 《Arthur Rimbaud, OEUVRE-VIE》Edition du centenaire établie par Alain Borer avec la collaboration d'André Montègre: Arléa 1991 p.1057.
- (2) 《Rimbaud Poésies》Préface, notices et notes par Jean-Luc Steinmetz: Flammarion 1989 p.251
- (3) ibd. p.251
- (4) 筆者拙稿「ランボーとプラトニズム」「詩論」15号 1993
- (5) 《ARTHUR RIMBAUD, OEUVRES COMPLETES, CORRESPONDANCE》Edition présentée et établie par Luis FORESTIER: Robert Laffont 1992 p.462
- (6) 《グランヴィル、花の幻想》谷川かおる訳、八坂書房、1993

(博士課程後期課程修了)